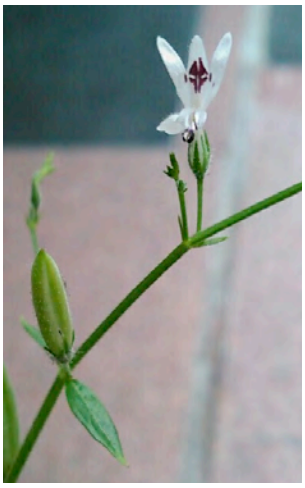
薬用植物センシンレンのインドネシア名の由来について

野村尚史　（ジャムゥ屋 テテスマニス）
アナント・ウィチャクソノ、西田有里、松田仁美（影絵人形遣い、ガムラン演奏家）

はじめに



生薬の一般名は、その伝播経路を反映し、地理的な名称分布を備えることが多い。インドネシアのジャムゥは、生鮮生薬を摺潰水抽出する伝統医薬であり、同国では広く普及している。そのジャムゥで利用されるセンシンレン（キツネノマゴ科）は、現地で「サンビロート」と呼ばれるが、これはインドやスリランカ、またインドシナから中国にみられる呼称と関連性がなく、地理的に孤立した名称である。そこで、この名称の言語的な由来を調査すると同時に、古い博物誌や文献での記載や遺伝的多様性も検討して、その伝播時期と経路を推定した。

結果と考察

「サンビロート」の名称は、ジャワ語の「サディラータ」から変化したと考えられるが、これはジャワで人気の高い影絵芝居の「ラマヤナ物語」に登場する「聖なる薬草」の名称でもある。影絵芝居の設定では、敵の放つ「蛇の矢」の傷を癒やとして「聖なる薬草」が登場するのだが、炎症の劇症化を抑制する抗炎作用があるセンシンレンは、古来より蛇咬傷の治療薬として利用されてきた歴史があり、その為に「影絵芝居の聖なる薬草」＝「サディラータ」と呼ばれるようになったと考えられる。

しかしながら、ラマヤナ物語の古典である古代インドや古代ジャワの叙事詩「ラマヤナ」を確認したところ、「サディラータ」は決してセンシンレンを示す単語ではなく、広く薬草全般を示す単語であった。そのため、センシンレンに「サディラータ」の名称が充てられたのは後代であると予想された。

また、博物記録や古文書を確認したところ、10 世紀から 19 世紀中頃までの博物書やジャムゥのレシピ集などには、センシンレンの記述が見いだせなかった。一方、19 世紀末以降の博物書やレシピ集・薬草録では、センシンレンの記載が急に現れることから、インドネシアへのセンシンレンの導入は 19 世紀ごろである可能性が示唆された。

そこで、GeneBank に登録されているインドネシア内外のセンシンレンの遺伝情報を基に、分子系統樹を描いたところ、インド国内ではセンシンレンのハプロタイプに多様性が観察された一方で、インドネシア国内では、スマトラからパプアニューギニアの広範囲に於いても、ハプロタイプの多様性が存在せず、かつ、インドネシアとスリランカのハプロタイプが一致していることが分かった。

これらの結果から、センシンレンは 19 世紀ごろにスリランカよりインドネシアに導入され、その際に蛇咬傷の生薬であることから「ラマヤナ物語」の「聖なる薬草」の名称が用いられて、「サディラータ」とよばれ、それが変形して現在は「サンビロート」の名称がインドネシア全土で用いられていると考えられた。

― 上記のセンシンレンの解説や生植物の展示に、センシンレンの登場する影絵芝居の上演や薬草ドリンクの試飲を組み合わせた、体験型イベントを全国で行う予定です。下記までご連絡ください。 ―

ジャムゥ専門店「テテスマニス」
東京都千代田区内神田 1-11-10 コハラビル　tetes.manis@gmail.com